

～「一本」を目指して～

大阪高体連柔道専門部
部長 亀元 政志

日本の柔道経験者は一本にこだわる人が多いと聞きます。こだわっている立技の「一本」とは何なのでしょう。IJF ルールの立技で一本を与える4つの基準は、「スピード、力強さ、背中が着く、着地の終わりまでしっかりとコントロールしていること」とあります。また、大正5年（1916年）「柔道審判規定解説」では一本を与える場合として、「(い) 故意または過ちにて倒るるにあらずして、一方より業を仕掛け、または相手の業を外したるがため、倒るること。(ろ) 業の種類により必ずしも正確には定め難きも、大体において仰向けに倒るること。(は) 相当の「はずみ」または勢いをもって倒るること」としています。どちらにしても読んだだけで柔道経験者が考える一本と同じ解釈ができる柔道未経験者はいないと思います。一本を言葉で表現することはとても難しいことだと思います。実際に体感したり、経験しなければわからない部分も多くあるので、言葉だけで表現することに無理があるのかもしれない。

私の好きな話に弓道の名人とその弟子の話があります。弟子が矢を放ち見事に的に当てるのですが、見ていた名人は「当たっていない」と言います。その後も弟子は何度も的に当てるのですが、名人はその度に「当たっていない」と言います。たまりかねた弟子が「当たっているのに、どうして当たっていないと言われるのですか」と尋ねました。すると、名人は何も言わずに的に板を替えました。そこで、弟子が矢を放つと矢は的である板には当たったのですが、その後力なく下へ落ちてしまいました。次に名人が矢を放つと矢は力強く板を割り、まだ先へ飛んでいきました。名人は弟子に向かって「当たるとはこういうことだ」と言ったそうです。よくできた話だと思います。世の中あまりにもよくできた話は作り話が多いので、これも弓聖と呼ばれた阿波研造と弟子であったドイツの哲学者とのあるエピソードをアレンジしたものではないかと思います。しかし、武術の本質をついたよくできた話だと思います。日本における柔道の一本とスポーツ化したJUDOの一本の違いがここにあるような気がします。試合で相手を投げて引き揚げて来ても指導者から「今の投げ方で勝ってもなあ～・・・」と言われた方もいるのではないのでしょうか。指導する側はきっと本当の一本ではないと伝えたかったのだろうと思います。言葉では表現しようがない感覚。言葉にすればするほど本質から遠ざかってしまう気がします。現在は、諸外国でも日本人以上に一生懸命柔道を修行して一本の意味がわかっている人も大勢います。高校生の皆さんはせっかく柔道発祥の地日本で柔道を学ぶのですから、本当の一本を取れる技術の習得を目指して稽古に励んでもらいたいと思います。

今年度、大阪の大会で先生方から「見事！」と言われる一本が多く見られることを期待して巻頭の言葉といたします。